第２回各務原特別支援学校跡地等利用検討委員会　議事要旨

日　　時　　令和５年５月17日（水）９時～10時40分
場　　所　　産業文化センター7階第１大会議室
出席委員　　益子典文委員長、犬飼利嗣副委員長、木村徹之委員、児島由香委員、
　　下野誠司委員、林桃子委員
欠席委員　　無し
議　　題　　議題１　課題の整理について
　　議題２　活用案について

議事要旨

・開会

委員長が開会を宣言

１．議題

議題１　課題の整理について

事　務　局　（課題の整理について、資料１により説明）

委　員　長　ハード的な課題に関し、前回委員から要望があったように、各務原市で既に展開している事業及び新たに提案があった事業について説明があった。
議題１についてご意見やご質問などあればお願いしたい。

副委員長　「あすなろ」「さくら」といった名称は教育分野・福祉分野それぞれの事業に記載があるが、同一の施設か。

事　務　局　名称は同一だが、別々の施設である。

委　　員　第１回において明確ではなかった市内の施設の状況が示され、施設として不足しているもの、充足しているものが明確となり、課題がクリアになったと思う。

委　　員　表２で、課題が明確に示されており、特にハード的な問題点が明らかになった。こうした問題点は、設備が整備されないと解消できないことであるため、対応すべきことが分かってきた。

委　員　長　資料で整理された内容は、前回委員会で課題となった、ハード的な課題がどこにあるかといった点をこまめに検討されているため、委員全員十分理解できたと思う。
制約があり、その制約の中で、ハード的な課題がどこにあるのか、委員の中で明確になった。この課題整理を基にした、提案に移ってもよろしいか。

委　　員　（異議なし）

議題２　活用案について

事　務　局　（活用案について、資料２・３・４により説明）

委　員　長　資料２の①②は、課題を抱えている施設の集約化を図る提案、③④は新しい可能性を考える提案で、現在の建物の多機能化を図るプランを提案された。

副委員長　就労継続支援Ｂ型事業所について、統合をした場合、現在川島の施設を利用している方はどうなるか。

事　務　局　家族送迎をお願いできる方については家族送迎、小型の送迎車を用意する案もある。また、ふれあいバスが時間的に利用可能であればそれを利用していただくことも考えられる。

副委員長　近いことを理由に利用している方もいると思う。その方にとっては、不便になることも考えられる。その点も踏まえ意見をお願いしたい。

事　務　局　距離的には遠くなるため、そのことが利用の支障になり得ることは認識している。それに対しては、送迎等の手段を検討することに加え、環境的には現在の施設より良くなるため、ご理解いただきたいと考えている。

副委員長　統廃合には付き物のような話ではあるが、川島の施設を利用している方が不便にならないよう配慮していただきたい。

副委員長　資料１に基づくと、喫緊の課題が不登校対策事業と就労継続支援Ｂ型事業所であることを踏まえると、福祉（事業）型専攻科については、もう少し後で検討してもよいのではないかと感じた。

委　　員　親しくしている方に障がい者の家族が２家族いる。軽度のダウン症だと思うが、両方の家族が共通して言っているのは、高校までは学校があるが、高校を卒業後が問題であるということ。働くためのジョブステーション的なもの―就労継続支援Ｂ型事業所のようなもの―が一番必要だということである。福祉（事業）型専攻科については、もう少し先延ばしでも良いのではないかと思う。一番必要なのは、現時点で障がい者の方が働くための受け皿だと考える。川島の施設利用者の交通アクセスの問題については、市のふれあいバス等、様々な検討ができると考えるため、私個人としては、就労継続支援Ｂ型事業所を最も推したい。

委　　員　今の話を聞いて胸が熱くなった。私の娘も身体障がいと知的障がいを持っており、この春、各務原特別支援学校を卒業し、現在は就労継続支援Ｂ型事業所に通っている。なんとか自分がやってみたいと思える場所が見つかり、先生方のご指導もあり、そこで働けるスキルを身につけることができて、通えている。

皆さん考えるのは、アクセスや職種といったことであるが、私の娘も岐南町に通っており、市内でも探したが、娘に合う仕事ということも考えると、なかなか見つからなかった。市内に受け皿が少ないということを、みなさん不

安に感じていると思う。
不登校の子どもたちが困っていることも事実で、絶対数を見れば不登校の子どもの数の方が今後心配されるかもしれず、どちらも天秤にはなかなかかけられないと感じている。
私の娘は、小学校１年生の漢字を覚えるのに１０年以上かかった。幼稚園の時から勉強して、高校２年生の時にやっと小学校１年生の漢字検定に合格できた。そういった子どもたちが自立していくことは本当に難しく、家族の力だけでそこまでもっていくのは難しい。福祉の力、学校の力、医師会等の皆さんに助けられて、自立していくことができたので、そういった部分の拡充があると良いと思う。実際に、同じ学年の友達も、進路先が無くて困っている子がたくさんいることも事実である。
そういった意味で、福祉（事業）型専攻科の話も興味があり、障がい者の生涯学習は、各務原市では難しい部分があり、大人になっても親子でいろいろな所に出向いて子どもに合った場所、子どもの居場所を探すということがあるので、自立しかけてもそういったことがあるので、そういう場所の拡充はうれしいと感じる。

委　　員　皆さん発言があったように、高等部を卒業後の受け皿が不足していることは事実である。虹の家・友愛の家は市が委託して運営しているが、ほとんどは民間で、そういう事業所がどんどん事業を拡大していけるかというと難しく、学校としても色々なところを開拓しているところだが、その子に合った進路先を探すということが難しい現状がある。
福祉（事業）型専攻科については、名前に惑わされる部分があるが、就労移行支援事業所、いわゆる福祉サービスのやり方の一つを示しているという理解で良いかと思う。
就労移行支援事業所もあまり数はなく、そういったサービスを受けたい方もいると思うが、本来の就労移行支援というのは、就職するためのスキルアップを目的としており、学校というよりも、訓練的な要素が強いという点、また、原則２年、場合によっては３年で、次のところに行かなければならないという制約があるサービスであるため、現状、受け皿、進路先という観点で考えると、福祉（事業）型専攻科の議論は、もう少し後で議論すべきことで、もっと喫緊の課題である不登校や、特別支援学校卒業後の進路先が無い子どものための課題解決を優先的に実施することが良いと考える。
また、福祉（事業）型専攻科について、実際ニーズがあるかは分からない部分がある。
学校の前面道路は一方通行の狭い道路であり、大型のバスは進入できないため、子どもたちは図書館まで歩いて、バスに乗車して修学旅行や校外学習

に行くという運用をしている。送迎を考えた場合、小型のバスを利用する等の考慮が必要だと思う。

委　　員　不登校対策あすなろ教室について、一言で不登校といっても、理由は様々で、教育に追いつけないケース、ギフテッドのような今の教育課程にマッチしていないケースなど、程度が色々だと思う。そういった中で、現状一部屋で、異年齢で活動しているのを、その子に合った学びの形を提示するということが今後必要になってくるのではないかと考える。

就労継続支援Ｂ型事業所については、企業から軽作業を受託して作業していくことが一般的であると思うが、県外には、自立訓練や生活訓練に近い形で、入所時の面談を通じて、例えば、卵焼きを焼けるようになりたいというような個人の意向を聞き取って、個々に合わせた就労を提案する事業所もある。

先程の発言を聞いて、子ども一人ひとりに合った就労の形や、障がいのある子どもたちは成長がゆっくりで、自分にとって何が得意なのか、その子自身が自覚を持てるようになるには、時間が必要であることを実感した。

就労継続支援Ｂ型事業所という形か、福祉（事業）型専攻科のような就労移行支援という形か、跡地利用における選択肢を設定するに当たっては、障がいのある子どもたちに、どのようなケアが必要かという課題を整理して、どのような取り組みが必要なのか、民間等どういった主体が実施するかということを踏まえて、各務原市における福祉のニーズや、どういったことが不足していて今後充足していく必要があるか整理して、検討していく必要があると思う。

あすなろ教室と、就労継続支援Ｂ型事業所・福祉（事業）型専攻科については、もしかすると、規模的に、また、特別支援学校の校舎は棟が３つに分かれているため、機能を兼ねることができるかもしれない。ただし、機能を兼ねた場合、それぞれの利用者同士の軋轢等がないように、試験的に少しずつ進めていくことが望ましいと考える。

各務原市には、福祉全般に関心の高い方が多いという印象がある。生涯学習や子どもたちのキャリア教育、リカレント教育という意味合いで、福祉分野に関して教育機関を誘致して、学生と一緒に社会人が学べる環境ができると良いと思う。

また、私自身も障がい福祉に関して知らないことが多く、障がい福祉にあまり関わりがない人は、知らないことが非常に多いと思う。障がいのある方と日常的に普通に接することが出来る機会が増えることで、障がい福祉に関する理解が高まっていくと思うので、教育機関を誘致し、障がいのある方と一緒に学べるような受け皿として跡地を利用することは意義があることだ

と思う。

障がい福祉に限った事例ではないが、東京藝術大学において、ＤＯＯＲという芸術と福祉に関する教育カリキュラムが実施されており、１年間のプログラムで、大学生と社会人学生が、座学や、福祉施設に出向いて学びをしているといった事例がある。福祉に関して、学生に限らず、色々な世代の方が共に学びあえるような機関があっても良いと思う。

一方、誘致できる教育機関となると、おそらく大学や高等専門学校等だと思うが、実現可能性については、調査が必要になるかと思う。

委　員　長　課題整理した、あすなろ教室と就労継続支援Ｂ型事業所、とりわけ就労継続支援Ｂ型事業所については、現状の課題を委員の皆さんが明確に感じており、強く要望したいということが本委員会での議論だったと思う。

あすなろ教室についてもハード的に非常に課題があるということで、この２つについては喫緊の課題ということで、ぜひ推進してはどうかという意見であった。

福祉（事業）型専攻科と、教育機関との連携については、優先順位からいうとやや低いという印象を各委員の意見から感じた。

ただし、まだリサーチが十分でない部分もあり、例えば、教育機関との連携であれば、新しく就労継続支援Ｂ型事業所が入る場合、そのテーマに関連した高等教育機関を誘致できるようであれば、機能的にも各務原市のニーズに合致するのではないかという意見もあった。

福祉（事業）型専攻科に関しては、現状の喫緊の課題を優先し、次のステップでも良いのではないかということだった。

まずは、あすなろ教室と就労継続支援Ｂ型事業所を優先に考えて、福祉（事業）型専攻科と教育機関との連携については、リサーチした結果、テーマや内容があすなろ教室や就労継続支援Ｂ型事業所に合うようなものであれば考えてはどうかという意見だったと思うがどうか。

委　　員　（異議なし）

委　　員　当初、全４回の委員会で方針を決定するということだったが、今後の３回目、４回目の想定のスケジュールがあれば、示してもらいたい。

事　務　局　事務局で検討した結果、委員会での検討が不十分となることは防ぎたいため、当初の予定より延長可能だと考えている。全５回で秋ごろまでに決めていきたいと考えている。

事　務　局　あすなろ教室と就労継続支援Ｂ型事業所については、現状の課題について、ご理解いただけたと思う。福祉（事業）型専攻科については、ニーズがどれくらいあるか分からないという意見があった。実際に障がいのある子どもやその保護者に対し、福祉（事業）型専攻科についてニーズ調査を行いたい

と考えている。承認いただければ、調査を行い、次回委員会で報告したいと考えている。

教育機関との連携については、誘致できる教育機関があるか実現可能性について、ヒアリング調査を行いたいと考えている。これについても、承認いただければ、調査を行い、次回委員会で報告したいと考えている。

委　員　長　事務局から提案があったが、いかがか。

委　　員　（賛成全員）

委　員　長　事務局には、次回委員会で調査結果の報告を求める。

２．連絡事項等

事　務　局　（特になし）